

日本理化学工業株式会社 大山 泰弘 氏 インタビュー

「働く幸せ」を考える。



日本理化学工業株式会社 大山 泰弘 会長

・大山会長の著書「働く幸せ」を拝読させていただきました。その中からいくつかのことを質問させていただきたいと思います。まず最初に大山会長が考える「働く」ということの価値、意味等をお教えてください。

大山：西洋文化では労働は苦役といわれています。ところが日本では労働は美德とされます。それを如実に表しているものが「働」という字です。数少ない国字（日本で作られた字）で人のために動くという組み合わせです。つまり人のために動くことが幸せにつながるということなのだと思えます。そのことを私に気づかせてくれたのが知的障がい者の人たちでした。

・最初は2名の障がい者雇用からはじまります。いきさつなどをお教えてください。

大山：当社が知的障がい者を雇用するころはまだ精神薄弱者と呼ばれていました。そういう時代に青島（せいちょう）養護学校の先生が来られ生徒さんの就職をお願いされました。施設に入ってしまうと一生働くことは出来ないで卒業するまでにせめて働くことを一度経験させてあげたい、ということでした。私も困ったなと思ってお断りしていましたが3度もお願いにこられたんですね。最後は就職とは言いませんので働く経験だけでもさせてください、とのことでした。働くことの幸せ、生きる力ということに強いお気持ちを持っておられたと思います。そして2週間の実習が始まりますが生徒さんたちは黙々と一生懸命にやってくれるのです。その姿を見た従業員が私たちも面倒を見ますのでたった二人なんだから何とかできるでしょ、と言うのですね。こちらはその言葉に「じゃあちょっと格好良いとこみせなきゃ」みたいなことでした（笑）。決して殊勝な気持ちでは無かったですね（笑）。

・あるご住職からお言葉を頂かれます。お気づきになった事柄などをお教えてください。

大山：私にはどうしてもわからないことがありました。施設にいれば楽に過ごすことが出来るのに、どうしてつらい思いをしてまで工場に働こうとするのだろうか？ということでした。ある方の法要のときに偶然にも隣の席にご住職が座られました。無言でいるのも気まずいので私の疑問を伺ってみました。そうしましたら人間の究極の4つの幸せについてお教え頂きました。人に愛されること、人に褒められること、人の役に立つこと、人から必要とされること。福祉施設ではありがたいと言葉をかけられることは無いのです。だから企業で仕事をして頑張ったね、ありがとう、という言葉から幸せを感じるのです、というものでした。

私が思っていたこととはまったく逆でしたので、人の幸せとはそういうものかという大きな気づきを頂きました。

・知的障がい者雇用について悩まれたこと、ご苦労されたことなどお教え頂けますか？

大山：障がい者のことを知っている福祉の方や学校の先生などは普段から面倒をみられているのですが職場での面倒ということでは仕事の成長は見られないと感じました。この子たちの理解力を育てるのではなく持っている理解力のなかで仕事が出来れば何とか出来るのではないかと思います。つまり信号の色などは理解出来ているのだから材料の計量なども色合せて作業できるようにしました。赤い缶に入れた材料は赤いおもりを載せて量るという具合です。そうしたら大量のロットを一生懸命に一気にこなしてしまっ、終わった時に職員はびっくりです。もう終わっちゃいました、もっとやって良いですか、と言ったのです。きちんと出来るんですね。そしてやはり褒められると嬉しいから一生懸命やる。これが大きなヒントになりました。時間の作業は砂時計を用意します。字が読めなくてもやりかたはあるのです。当社ではたった1人の健常者マネージャーに13人の知的障がい者、その内の半分は重度の障がい者です。現在のような助成金制度が出来た前から川崎工場では実践しています。

・JIS規格もクリアする生産工程の改革も取り組まれております。工程改革を浸透させるうえで大事にされていることは何でしょうか？

大山：障がい者の能力が低いからと言って出来ない事を障がい者に責任転嫁してはいけません。やってほしいことに対しては出来るような段取りを考えることが職員の仕事です。それを続けてきて理化学工業は成り立ってきました。障がい者も自分のために教えてくれるから嬉しい、職員もいろいろあってもその結果障がい者が出来たようになったということで嬉しい、両方のメリットが重なり合い仕事を介しての結びつきなので強い信頼関係が出来る。企業だからやらなくてははいけないこともはっきりしている。そこが福祉と企業の違いなのではないかと思えます。思いやりの心だけではなく、働いて役に立つという嬉しさは大きいのです。

・経営方針の3番目に「全従業員にとってつねに能力を十分に発揮でき、幸せな人生を送れる職場とする」とあります。この言葉に込めた思いをお聞かせください。

大山：障がい者が人の役に立って働けるということで生き生きとされます。マズローの自己実現という理論もありますが、より大きく役に立ってこそ自己実現が認められるのかと思います。私自身は逆境を甘んじて受けて最大限に活かそうと思いついた理化学工業だったのです。そこに知的障がい者の方が入社し、住職から教を頂き、友人たちにも引けを取らないというような関心みたいなものがあつたのかもしれない。

・現在の経営者への応援のエールをお願い出来ますか？

大山：人間の幸せはまわりに役に立つことではないかとお話しをしました。私は法学部を出ているのですが日本国憲法にも全ての国民が勤労の権利を有し義務を負う、とあります。どんな人でも義務を負って役に立って働いてください、ということですね。勤労するということに対して国ももっと真剣に考えてほしいと思います。もっと人間の幸せを考えて動いて欲しいと思います。福祉とは物の幸せと心の幸せが合わさって福祉なのに今の国のありかたは正しいのだろうかと考えます。どんな人でも社会に役立つことが出来る場を作っていくかといけません。ベルギーのように国が最低賃金を負担し企業が障がい者の働く場を支援することによって大きなメリットも享受できるような仕組みが必要だと思います。日本の職人文化をもっと国が上手に活用し字が読めなくても重度の障がい者でも少しでも役に立つことが出来る社会づくりが必要と思うのです。人の役に立つため動けば必ず大きな自己実現に繋がります。

・最後になりますが、今の日本には働くことに前向きになれない若者も多いように感じます。何かメッセージをお願い致します。

大山：少し前に小学校5年生の生徒さんが工場見学に来られました。学校の宿題でレポートを書くために来られたのですが見学が終わってから理化学工業で働いている人は字も読めない、数も数えられない人たちなんだよ、でもこうして一生懸命やってくれているんだよ、という話をしました。2週間ほどしてからその生徒から手紙がきて「天の神様はどんな人にも世の中の役に立つ才能を与えているのです。僕ももっと勉強して世の中の役に立つ人になります。有難う御座いました。」という内容でした。人は全て共感脳というものを持っているそうです。群れの中でまわりに役に立つことにより幸せや快感を覚えるというものです。人の役に立つということは自己犠牲ではなく幸せに繋がるものですね。脳の形成は3歳くらいまでに出来てしまうような話もありますが、まわりの人が共感脳を活性化するような意識が必要でしょう。じっと待っていないで人のために動いてみると自分の幸せにつながってきますよ。これを若い人たちに伝えたいです。

日本理化学工業株式会社

〒213-0032 神奈川県川崎市高津区久地2丁目15番10号

☎044-811-4121 ☎044-811-4441

E-mail consumer@rikagaku.co.jp

大山 泰弘 氏 プロフィール

1932年東京生まれ。日本理化学工業会長。日本理化学工業は1937年に父・要蔵が設立したチョーク製造会社。中央大学法学部卒業後、病身の父の後を継ぐべく同社に入社。1974年、社長に就任。2008年から現職。1960年、はじめて知的障害者を雇用して以来、一貫して障害者雇用を推し進めてきた。1975年には、川崎市に日本初の知的障害者多数雇用モデル工場を建設。現在、74人の社員のうち55人が知的障害者（障害者雇用割合約7割）。製造ラインをほぼ100%知的障害者のみで稼働できるよう、工程にさまざまな工夫を凝らしている。こうした経営が評価され、2009年、渋沢栄一賞を受賞した。